

Title	遺愛幼稚園(北海道函館市)における昭和二十年代の保育実践
Author(s)	永井, 理恵子
Citation	聖学院大学論叢, 25(1), 2012. 11 : 13-30
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4184
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

〈原著論文〉

遺愛幼稚園（北海道函館市）における昭和二十年代の保育実践

永 井 理恵子

抄 録

遺愛幼稚園は、遺愛女学校に附属する幼稚園として、明治28（1895）年、北海道函館市元町に創立された。遺愛幼稚園は女学校の敷地内に新築園舎を建てて開設されたが、明治40（1907）年の大火で焼失、現在地に新築して保育を再開したのは大正2（1913）年のことである。この大正新築園舎および、創立より昭和初期までの保育実践については、既に発表した。本論文は、その後の昭和二十年代の保育について、その内容と方法を明らかにすることを主たる目的としたものである。分析考察には幼稚園保存の史料を用いた。また、この時期の保育の背景として、昭和二十年代の我が国における幼稚園教育に関する各種の文書の成立過程や内容についても紹介している。

キーワード； 遺愛女学校，米国メソジスト監督派教会，昭和二十年代，フレーベル恩物，頌栄保姆伝習所

序

遺愛幼稚園は、遺愛女学校に附属する幼稚園として、明治28（1895）年、北海道函館市元町に創立された。遺愛幼稚園の創始は、明治7（1874）年に米国メソジスト監督派教会婦人伝道協会^①から派遣されて教会とともに遺愛女学校を開設・運営していた米国人宣教師らの手による。遺愛幼稚園は女学校内の空地に新築園舎を建てて開設されたが、明治40（1907）年の大火で、女学校舎と幼稚園舎は完全に焼失した。のちに女学校は土地を移転して再開し、一方の幼稚園は大正2（1913）年に旧来の元町に新築園舎を竣工して保育を再開した。この園舎は今日まで継続して保育実践に使用されており、平成25（2013）年には築百年を迎える現役の園舎である。

明治～大正～昭和期の遺愛幼稚園は、遺愛女学校の卒業生を神戸の頌栄保姆伝習所に派遣し、ハウ（A. L. Howe：1852～1943）の薫陶を受けた者を保姆として起用し保育を展開していた。そのため、遺愛幼稚園の保育実践の内容構成と方法は、基本的にハウの保育理念と方法を正統的に受け継

いでおり、フレーベル主義に基づき、恩物を用いて構成されていた。

遺愛幼稚園には、大正2年の再興以来の多様な史資料が今も保存されており、その史資料整理と分析については拙書『近代日本キリスト教主義幼稚園の保育と園舎 遺愛幼稚園における幼児教育の展開』⁽²⁾に詳しい。拙書中において遺愛幼稚園の保育実践および園舎の創立時から昭和初期に関する分析考察は終了しており、本論文はその後続く昭和二十年代の保育実践について、保存史料である保育日誌、写真、蔵書および保存教材教具、玩具などを用いて分析考察をおこなうものである。なお、拙書で考究した時期と本論文で考察をおこなう時期との間に、昭和十年代すなわち戦時下の保育実践期があるが、この期間については現在、研究の進行中であり、未発表となっている。最終的には、明治期から昭和二十年代までの通史を完成させる目標を持っており、本論文はそのごく一部である。

遺愛幼稚園に関する一連の調査研究は、2008年の夏から開始され、聖学院大学特別研究休暇期間（2010年4月～9月）を用いて、本格的な史料整理と研究を遂行した。昭和二十年代の実践研究については、一部、学会発表をおこなっている⁽³⁾。

昭和二十年代の遺愛幼稚園は、児玉満園長のもとに、戦後の新しい社会的状況のもと、日本人による遺愛幼稚園の保育を完成させていった。昭和5（1930）年より日本人としての初代園長に就任していた児玉満は、終戦を迎え安定した教育環境を得て、昭和15（1940）年から保姆として勤務していた太田嘉受子とともに、遺愛幼稚園の伝統と、新しい国の方向性とが相俟った独自の実践の道を進んでいった。そこには、婦人宣教師らの影響を離れて、自分たちならではの保育を創造しようとした遺愛幼稚園の保育者らの思いを見ることができる。

遺愛幼稚園の保育日誌は、昭和初期以降の昭和十年代も保存されている。その後、昭和29（1954）年3月まで、完全ではないが部分的に保存されている。また、本論文においては外部文書まで広げての実証をおこなっていないが、昭和二十年代の日誌は非常に詳細にわかりやすく書かれているため、この日誌の分析の範囲だけでも、相当に詳細な考察が可能であると考えられる。

本論文は2章構成で展開する。

第1章においては、昭和23（1948）年に文部省（現・文部科学省。以下、同じ）より示された「保育要領」について紹介する。この「保育要領」は、昭和31（1956）年に公布される「幼稚園教育要領」初版の前哨的なものとして、当時の文部省が新たに作成したもので、大正15（1926）年に公布された勅令「幼稚園令」と、「幼稚園教育要領」の中間に位置する重要なものであった。米国教育使節団と、当時の日本の幼児教育を牽引する立場にあった研究者・実践者によって検討されて作成された「保育要領」は、当時としては画期的な視点を幾つも含んだものであった。本論文で考察する昭和二十年代は、「保育要領」が作成されて「幼稚園教育要領」初版が公布されるまでの間に位置する時期であり、この時期の実践を考察する際に「保育要領」について看過することはできないので、第1章にて「保育要領」の成立過程と内容を述べる。

第2章においては、昭和二十年代の遺愛幼稚園における保育実践のありかたを、当時の日誌をもとに分析考察する。「保育日誌」から「幼稚園教育要領」初版までの間に位置する昭和二十年代、キリスト教系幼稚園である遺愛幼稚園が、「保育要領」の内容をどのように受け取って実践に向っていたのか、興味は尽きないところである。第1節において当時の日誌から保育の流れを紹介し、第2節において、当時の実践の特徴を描出することとする。

第1章 「保育要領」（昭和22年 / 1947）の成立過程とその内容

第1節 「保育要領」の成立過程

① 「学校教育法」（昭和22年 / 1947 3月31日公布, 4月1日施行）

戦後日本の幼稚園教育は、昭和22（1947）年4月より施行された「学校教育法」に幼稚園が組み込まれたところより、新たな規定のもとでの教育が始まった。

昭和20（1945）年末、大日本教育会幼児保育部会は文部省に対して、幼稚園関係法規の改訂その他の要望を提出した。こうした日本国内での動きも看過できないものではあるが、同時に米国教育使節団の関わりについても忘れてはならない。昭和21（1946）年3月、連合国軍総司令部の招請により、米国教育使節団が来日した。使節団はアメリカ合衆国における学者と教育学者から成り、約一カ月にわたり日本の教育事情を視察し、日本教育家委員会の協力の下、今後の教育の在り方に関する報告書を作成した。このなかには、幼稚園に関する具体的な記述は殆ど見られなかったが、将来的に幼稚園を正規の教育制度に組み込むことが望ましいと提言されたのである。

昭和21（1946）年8月、米国教育使節団、来日の際に日本教育家委員会の委員として携わった人々を中心とした教育刷新委員会が内閣に設立された。同委員会は中央教育審議会に改組される昭和26（1951）年まで142回の総会を開き35回の建議をおこなった。この建議に基づいて、学校教育法その他の教育に関する基本的な法規が制定された。

こうして成立した「学校教育法」は、終戦後、新たに定められた「日本国憲法」「教育基本法」に基づき、それまでは別個に示されていた学校教育に関する勅令を全て統合し、一本化して、日本における「学校」の教育の基本について総合的に示したものであった。さきに述べたように、幼稚園教育に関する勅令「幼稚園令」は、他の学校令と比較して非常に遅れた時期に示されたものであったが、この「学校教育法」において幼稚園も他の学校と同等に扱われるに至った。ここにおいて、日本における幼稚園も、他の学校教育と並ぶものとなった。

1で述べたように、昭和期の日本における幼稚園教育は、大正15（1926）年制定の「幼稚園令」によって規定されていたが、終戦後は、実行力は停止しており、ただ「保姆」の名称が廃されて「幼児ノ保育ヲ掌ル職員」となった。実際の幼稚園教育に関しての新たな規定は、「学校教育法」が制定された後に示されることとなる。

「学校教育法」は昭和22(1947)年4月1日より施行されたが、これと同時に幼稚園も学校教育体系のなかに組み込まれ、この時に「幼稚園令」は廃止された。

「学校教育法」は、その第7章が、幼稚園に関する条文であった。第77条に幼稚園の目的が示されており、「幼稚園は、幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする」とされた。続く第78条では、5つの目標が掲げられた。その5つの目標は、昭和31(1956)年に公布される「幼稚園教育要領」初版における保育内容を示す「領域」の柱としても応用されるが、「幼稚園教育要領」初版における「領域」は「学校教育法」第78条に示された5つの目標そのままではなく、6つの「領域」として立てられた。

②「保育要領」(昭和23年/1948 3月発行)の成立過程

一方、文部省は、「学校教育法」が施行される一か月前の昭和22(1947)年3月、「幼児教育内容調査委員会」を設置し、新しい幼稚園教育のための手引書「幼児保育要綱」(仮称)を編集するべく活動を開始した。この調査委員会は幾つかの審議事項を持っていたが、そのなかの一つとして「幼児保育要綱」(仮称)の作成は大きな位置を占めており、ここでの論議が「保育要領」の基盤となった。同時期、小学校・中学校において「学習指導要領」の作成への動きが出ており、それと時期を同じくして作成されていた「幼児保育要綱」(仮称)を、「学習指導要領」と同格のものとするのが目指されて、これが「保育要領」の基となった。

「幼児保育要綱」(仮称)の編纂に当たった「幼児教育内容調査委員会」は、委員長を倉橋惣三が務め、坂本彦太郎、山下俊郎、及川ふみ、内山憲尚、功刀嘉子、副島ハマ、海卓子などの学者や実践者、全16名の委員によって構成された委員会であったが、ヘレン・ヘファナン(C.I.E係官、H. Heffernan)の示唆に負いつつも、実際の執筆は山下俊郎がおこなった。そして、「保育要領」第一刷が発行されたのは、昭和23(1948)年3月であった。この「保育要領」が、後に「幼稚園教育要領」制定へとつながるのである。

「保育要領」は、副題として「幼児教育の手引き」と記され、幼稚園のみのものではなく、保育所や家庭をも範疇に入れたものとして著された。「幼児教育内容調査委員会」はヘファナンの招集によって開催され、毎週開催されたという⁽⁴⁾。ここで興味深いのは、通訳をしていたのが東洋英和女学院の功刀嘉子でキリスト者であったということであり、また、ヘファナンの原案にもキリスト教的色彩が含まれていたということである。もちろん、その色彩が顕著な箇所については委員らが削除を依頼し、作成された「保育要領」からはキリスト教的色彩は消されていた。この、終戦後の幼稚園教育のスタート時点でも、明治初期の時と同じく、キリスト教の影響が大きく存在していたということは、非常に興味深いものである。

第2節 「保育要領」の構成と内容および「保育要領」に見られたキリスト教的思想

昭和23(1948)年3月に文部省が刊行した「保育要領」は、全7章から成り、それに参考図が添

付された。戦後、国が作成した最初の幼稚園教育に関する文書であった。これには法的拘束力はなかったものの、それまでの集大成として作成され、「幼稚園教育要領」に継続発展するものとして重要なものであった。サブタイトルに「幼児教育の手引き」と記され、幼児期の子どもの発達特性から、集団教育・保育の場での留意点などが整理されて示された。

戦時下の日本では、「超国家主義」「軍国主義」的な社会情勢のなか、キリスト教主義幼稚園は、宣教師の本国送還に伴い、園長を失ったり、幼稚園の存続が危機的状况に陥ったりした。戦後、活動を停止していたキリスト教系幼稚園保姆らの研究団体であったキリスト教保育連盟（JKU）は、終戦後の僅か二カ月後の昭和20（1945）年10月には活動を再開した。

「保育要領」「幼稚園教育要領」とキリスト教系幼稚園との関わりは、「保育要領」作成の時点から始まる。「保育要領」作成に当たって結成された「幼児教育内容調査委員会」の委員長を倉橋惣三が務めたことは既述のとおりであるが、その委員の一人として、キリスト教関係者としては、副島ハマ（厚生省公衆保健局栄養課）と功刀嘉子（東洋英和女学院師範科）が参入した。功刀はヘファナンの通訳として終戦直後から文部省に関係しており、「保育要領」をまとめていく際にも重要な働きをしていた。委員だった多田鉄雄の回顧によれば、功刀と副島は同じキリスト系の人物としても考えが相当に異なると述べている⁽⁵⁾。すなわち、多田（私立池袋幼稚園長、成城大学教授）によれば、委員の皆がヘファナンの原案に対して意見を述べたけれども、やはり英語力が優れていた功刀が通訳として間に挟まっていたため、功刀の保育理念が色濃く反映した「保育要領」になったと述べている。多田自身、「私たちは自由の理念も必要だが、しつけも必要だと思いましたが、英語がそう通じないこともあて、その点が十分にはとり入れられなかったように思います。同じキリスト教の関係でも、功刀さんと副島さんの考え方は違いました。副島さんは、型にはめるというわけではないが、今までのしつけも大切だと考えていたような気がしました」⁽⁶⁾と述べている。それ以上の記述はないので詳細については事実としては確認できないが、著者が判断するところ、およそ次のような解釈ができると考えられる。すなわち、拙書で述べているように、アメリカでの論争とも相俟って、大正期の日本におけるキリスト教系幼稚園での実践は、大きく2派に分れていたことは周知のとおりである。つまり、フレーベルの伝統的方法に基づいた実践を継続していた頌栄系の幼稚園群と、明治末期から大正期にアメリカから入ってきた、児童中心主義的思想に基づく新教育の系列に則った幼稚園群との2派である。アメリカでは、この2派の論争には明確な決着がついており、後者が優位となっていた。これら2派のうち、功刀嘉子が所属していた東洋英和女学校は、後者の系列に属しており、フレーベル恩物主義ではなく、自由保育を中心とした実践方法を導入していた。その系列にある功刀が、終戦当時のアメリカから来日したヘファナンの原案の持つ自由保育中心、児童中心的な、幼児の主体性を前面に押し出した思想に同意しつつ通訳を務めていたであろうことは、容易に想像できる。それに対して副島は、全面的に同意するのではなく、やや規律的な部分を持つことも必要だと考えていた、ということ、多田は述べているのではないかと考えられる。

明治初期に日本に幼稚園が導入された時にもその背後にキリスト教が潜んでいたのと同様に、戦後の「保育要領」作成の背後にもキリスト教色が濃く存在していたことがわかる。いずれも、幼稚園教育の内容と方法が我が国に導入される際には、その根本を形成するキリスト教については捨象され、その外殻のみが導入されたという事実は興味深い。

「保育要領」が公刊された後、キリスト教系幼稚園でも、新たな教育課程の編成が当面の課題となった。自由度の高かった「保育要領」であるから、そこからキリスト教系幼稚園ならではの教育課程を構築するための努力が不可欠であった。日本キリスト教教育協議会(JCCE)のカリキュラム研究委員会、キリスト教保育連盟などにおいて、キリスト教系幼稚園での教育課程に関する研究がおこなわれた。戦前からの長い研究の道程を持つキリスト教系幼稚園は、戦後も、キリスト教系以外の幼稚園の教育課程とは異なる独自の教育課程の編成を目指した。雑誌『基督教教育』は、その時代におけるキリスト教保育の方向性を示す重要な場となり、ここに、キリスト教系幼稚園で実践するための様々な教育課程が示された。

第2章 昭和二十年代における遺愛幼稚園の保育

第2章では、遺愛幼稚園に保存されている昭和24(1949)年8月～昭和29(1954)年3月(完全ではない)の日誌をもとに、昭和二十年代の遺愛幼稚園の実践を描出する。

本章の構成は、以下のとおりである。第1節では、昭和二十年代の遺愛幼稚園における平均的な保育活動の流れについて、日誌全体から読み取ることとする。第2節では、昭和二十年代の遺愛幼稚園においておこなわれていた保育活動を、幾つかの項目に整理して分析考察する。本論文においては、著者が発掘した日誌そのものを掲載する誌面の余地がなく掲載できないことが非常に惜しまれる。機会を得て別途公表を試みたい。

第1節 基本的な日案

昭和二十年代、本書において分析に用いる昭和24(1949)年～昭和29(1954)年の間の日誌によると、この当時の日案は、およそ以下のものであったと整理できる。

～9:00 登園

9:00～9:15 ないし9:30 自由遊び 室内運動場にて

9:15 ないし9:30～10:30 頃 朝の集会

全園児が遊戯室に集合しておこなう。遊戯室へは並んで、マーチに合せて入室。

時期により「会集」と呼ばれている。

・この間 最初に礼拝 10分 讃美歌、暗誦、祈り

その後 歌、遊戯

10：30～11：00 恩物活動 「教室」にて

「お仕事」と呼ばれている。当時は「教室」と言っていた。

11：00～11：30 自由遊び 室内運動場もしくは屋外（前庭、後庭）にて。

※月・火は、自由遊び終了後、全園児で遊戯室、あるいはクラスごとに各保育室で、紙芝居を読んでもらったり、伝達事項やお話を聞いたりして、11：45頃、降園。

12：00～13：00 「教室」にてクラスごとに昼食

13：00～13：30 帰りの会 遊戯室にて

紙芝居を読んでもらい、話を聞いたり手紙や月謝袋を貰ったりする。

13：00 降園

これが、だいたい平均的な日々の流れであった。特徴としては、以下の点が挙げられる。

- ・朝の全体集会前の自由遊びは非常に短い。
- ・全園児が遊戯室に集っておこなう集会は、そのなかに礼拝も組み込まれ、全園児が顔を合せて歌や踊りを披露しあったり、ともにしたりする、重要なものであった。遺愛幼稚園においては、欠かすことのできない、毎朝の行事である。朝の集会は、大きくまとめて、礼拝+歌舞音曲の構成で、礼拝時間は短く10分程度である。礼拝のなかでは特別に長い話がおこなわれるわけではなく、讃美歌を歌い、聖句を暗誦し、祈りを捧げるくらいのものである。その後、全体で歌ったり踊ったりをおこなうのであるが、クラスごとにやることもあれば、希望者を募って皆の前で踊らせたり歌わせたりもしている。
- ・その後、各「教室」(ママ)に分れて、主としてフレーベル恩物を中心とした座業活動をおこなう。これも、遺愛幼稚園においては、昭和二十年代末に至っても不可欠な活動であり、ほぼ連日、必ずおこなわれている。しかしながら、その内容は、大正期と比較すると随分と変化しており、自由画を描くだけの日も増えてきていて、伝統的な恩物を毎日きっちりと順番に実践し制覇していくというものとは全く異なった内容となっている。これについては第3節で詳しく述べる。
場合によっては、この時間枠で、クラス単位で歌舞音曲をすることもある。
- ・クラス活動の後に自由遊びの時間も設けられているが、この時間は可能な限り屋外にて活動している(1952/5/16, 1952/6/28ほか)。昭和27(1952)年5月27日には、新しく園庭に箱ブランコが設置されたので、その乗り方を練習したと日記に書いてある。室内で活動している場合には、遊戯室や教室ではなく、室内運動場でおこなったと書いてある。私見であるが、園舎の構造から見て、外来客のない日には、玄関ホールも遊び場として使用されていたのではないかと推測される。
- ・弁当は週に3日なのであるが、弁当の時間が非常に長く取られているのが特徴的である。弁当は手持ちバスケットに入れて持参していた(1949/9/22, 1952/4/25)。昭和27(1952)年4月22日付で家庭に持たせたお便りは、バスケットの形をした紙の裏に手紙を書き、表面はバスケットの

絵が描いてある（保存史料あり）。

- ・帰りには、全体ないしクラスごとに帰りの会が持たれているが、この昭和二十年代においては、紙芝居が非常に多く用いられている。殆ど毎日、紙芝居が読まれているのではないかと考えられる。紙芝居は不可欠である。その他には、保育者による話などもおこなわれている。
- ・降園時間が五月雨方式であるのも特徴的である。年少から年長へ、あるいは迎えが来た子どもから、または、早く帰り仕度ができて静かに待たされたクラスから、などと、様々な方法ではあるが、降園時間に段階が持たれている。

意図的に降園時間がずらされている日もあり、年少・年中が帰宅した後に年長だけ残って遊戯や合奏の練習をしたり、ワークブックをしたりしている日もある。降園時間については、非常に緩かったようである。迎えの保護者は、保育終了まで待っていたのであろうか。

- ・一日を通して活動場所は相当に厳密な基本形があったと考えられる。日誌の記録者によって活動場所を詳細に記入している者とそうでない者があるのであるが、変則的な日があるにせよ、基本的には、遊戯室は全体でおこなう活動に使われ、恩物・製作活動は「教室」と呼ばれる保育室でおこなわれ、自由遊びは室内運動場でおこなわれていた場合が多い。遊戯に関しては、朝の集会で踊る場合には遊戯室であるが、クラス活動の時間内に各クラス単位で歌や遊戯をおこなう場合には、遊戯室ではなく各教室でおこなわれていたように既述されている。昭和二十年代における遊戯室は、礼拝その他の重要な活動をおこなうための室であったと考えられる。同時に、この園舎の室配置から考えて、ある組はクラス活動時間内に歌や遊戯をおこなうため中央の遊戯室に出てしまうと、クラス活動をしている他の保育室がドア一枚で遊戯室に隣接しているため、騒音の問題が考慮された可能性もあろう。
- ・朝の全体集会を行なう遊戯室への入室は、「マーチで並んで入る」スタイルだったことが日誌に書かれている（1949/9/17, 1949/9/24）。

第2節 諸活動の内容

この時期の遺愛幼稚園における保育活動は、活動内容の種類が非常に増えたのが大きな特徴である。昭和22（1947）年に示された「保育要領」においても、保育内容は非常に種類豊富な、全12項目から成るものであったが、遺愛幼稚園においても、様々な保育活動が試みられ導入されていた。とは言え、大正期から継続的におこなわれている礼拝に関しては厳然と揺らぐことなくおこなわれており、そこに変化は見られない。

① フレーベル恩物

遺愛幼稚園においては、昭和二十年代においても、フレーベル恩物活動は不可欠であった。具体的に「恩物」という語は全く見られなくなったが、一つひとつの活動の名前で、クラス活動のなかに登場する。日誌に記録されている恩物活動としては、以下の種類が確認できる。

- ・三色六体（第一，第二）：全園児での全体活動のなかに導入されていることもある。この場合はゲームとして展開していたようである。
- ・積木（第三～第六）：非常に多くおこなわれている。なお，難易度と年齢は必ずしも比例しているわけではなく，第六であっても年少組でおこなわれていることもある。
- ・板並べ（第七）：「板ならべ」のほか「ちえ板」という名称でも日誌に登場する。
- ・箸並べ（第八）
- ・環並べ（第九）
- ・石板に絵を描く（第十）
- ・切紙（第十三）：これに連動して，鋏を用いた製作活動も展開している。
- ・摺紙（第十八）：「おり紙」との名称で，様々な動物を折ったりしている。
- ・粘土細工（第二十）：「ねんど遊び」として多数回おこなわれている。

上記以外の恩物，すなわち「織紙」「繡紙」などに関しては，既述が全く見られない。保存史料には，「織紙」「繡紙」の道具や作品が残されているのだが，昭和二十年代の日誌に記録がないということは，昭和二十年代にはおこなわれていなかったものと判断できる。

この時期，保育者として勤務しており後に昭和 49（1974）年～昭和 59（1984）年まで園長として勤務した太田嘉受子は 2012 年現在 107 歳にて健在であるが，太田は 2010 年 9 月に，この「織紙」の道具について記憶がないと答えている。ここに，実際に「織紙」が昭和二十年代には使用されなくなっていたことが裏付けられる。

また，フレーベル恩物には同じものはないけれども，「貝合せ」「おはじき」といった活動もクラス活動のなかに盛り込まれている。「貝合せ」は古く明治期より「貝ノ遊」などの名称で幼稚園でのクラス活動に導入されてきた伝統的な幼稚園教具であるから，こうした教具も我が国の幼稚園における保育活動のなかで多く採用されてきたものとして捉えることができる。一方の「おはじき」は，古くは明治期から幼稚園の活動に用いられてきていたもので，もともとはガラス製ではなく貝の一種から作られていたので，その貝の名前「鈿螺」（きさご）が変化し「キシヤゴ」と呼ばれていたものである。明治 35（1902）年にガラス製のものが開発され，今日われわれがイメージするガラス製の平べったいものとなった（『日本人形玩具辞典』（株）東京堂出版 齊藤良輔編）。遺愛幼稚園には「おはじき」が保存されていないため，実際どのようなものが使用されていたかは不明である。

② 絵画製作活動 / 「お細工帳」 / 「ペスティング」（←著者注：＝ペースティング，Pasting）

フレーベル恩物には含まれていないのであるが，昭和二十年代の遺愛幼稚園において，恩物と同じ時間枠のなかでクラスごとに取り組みされている活動に，絵画製作活動がある。

絵画としては「自由画」という活動があるが，これの回数が非常に多いのが特徴で，他の恩物や製作活動がおこなわれた日でも，その時間枠のなかに「自由画」が併記されている。

さらに，「ハサミの練習」「貼る」「ちぎり紙」といった活動も日誌に見受けられ，この時期になる

と多様な製作活動が展開するようになったことがうかがわれる。

また、「おさいく帳」といった単語も日誌に見ることができ、各個人で製作活動を貼る帳面を持つようになっていたことが確認できる。

幼稚園に保存されている史料のなかに、絵画製作活動の成果を見せるものがあり、「おさいく帳」「じゅうがちょう」「ぬりえ」などが大量に保存されている。氏名が書いてあるものを幼児名簿から検索すると時期が特定できる。これを見ると、フレーベル恩物で用いる「切紙」用に市販されているものを用いて図形を描写しているものもあれば、「おり紙」で自分で折ったものを貼ってクレヨンで周囲にデザインを描いたもの、音階の練習をしたものなども見られる。

③「うた」/「お遊戯」/「律動」/「団体遊戯」/「集団遊戯」/「リズムバンド」/「おはようスキップ」/「おはようケンケン」など

昭和二十年代の遺愛幼稚園では、歌舞音曲が非常に多くおこなわれていた。③に列挙した活動項目は全て歌舞音曲の範疇に入るものである。

ただ、分析考察は困難である。その原因は、遺愛幼稚園の日誌では、上記の「うた」「お遊戯」「律動」が、明確に区別されて実践されているわけではないということである。同じ曲名が「うた」になったり「お遊戯」になったり「律動」になったりと、様々な範疇で記述されている。「お遊戯」として振りが付けられていたものか、もともと「うた」だけだったものに遺愛幼稚園の保育者が振りを付けて「お遊戯」としたものか判然としない。「お遊戯」と「律動」が明確に区別されていないのは、保育者によって両者が別のものであるとは認識されていなかった可能性もある。「うた」に関しても、遺愛幼稚園の日誌では、「うた」という表現が用いられており、「唱歌」とされていない。「うた」の量は膨大で、礼拝の時間に歌われる讃美歌以外にも、様々な「うた」が多く歌われた。クラスで、全体で、立候補者が全体の前でと、多様な場で「うた」が歌われていた。

しかし、いずれにしても、「歌いながら踊る」という活動、あるいは単に「踊る」という活動は、遺愛幼稚園において非常に多くおこなわれていた。幼稚園に残されている史料にも、「うた」と「舞踊」に関する史料が非常に多い。

さらに、この時期の日誌には、「団体遊戯」「集団遊戯」という単語も度々登場する。残念ながらこれらには具体的な題名が記述されているものが見当たらなかったため、これらの内容を詳細に確認することは不可能なのであるが、「自由遊び」という表記が別に多出していることから考えても、「団体遊戯」「集団遊戯」とは、おそらく「お遊戯」「律動」と同系列の、音楽に合わせて集団で踊るというものであろうと判断できる。昭和二十年代の遺愛幼稚園は、非常によく歌い踊ったことが、日誌から確認できるのである。また「おはようスキップ」「おはようケンケン」などの面白い活動項目も記されており、朝の集会のなかでスキップしたり「ケンケン」をしたりと、積極的に身体を動かそうとしていたことも読み取れる。

その他に、「リズムバンド」という表記も幾つか見られる。さして数が多いわけではないが、これ

はダンスではなく、「バンド」、すなわち楽器の演奏を指している。「リズム」という語は、昭和22（1947）年の「保育要領」で初めて導入された新語であるが、遺愛幼稚園では単なる「リズム」活動ではなく「リズムバンド」という名称の活動が多く出てくる。この「リズムバンド」は、合奏のことである。遺愛幼稚園には、「ミス・バイラーに頼んで買ってきていただいたもの」と記録されている“The RHYTHM BAND SERIES”という本が保存されていて、これは解説書1冊と譜面本3冊から成るシカゴ製のものである。なかを見ると、楽器の配置図や、トライアングルやウッドブロック、タンバリンやカスタネットが写真つきで載っており、その使用法が解説書に書いてある。これらの本は残念ながら出版年が記載されていないのであるが、ミス・バイラーが遺愛幼稚園長をしていたのが昭和3（1928）年～昭和4（1929）年であるから、これらの本は少なくとも昭和二十年代には遺愛幼稚園に存在していたことは間違いなさであろう。昭和二十年代の遺愛幼稚園では、こうした本を利用しながら、アメリカ式の最新のリズムバンド活動を展開していたのである。

なお、「礼拝」の枠のなかで歌われている歌は、いわゆる「こどもさんびか」の領域に含まれる「ばらばら落ちる雨よ」などもある一方で、大中寅二作曲・深山澄作詩による「ちいさいおてて」「きれいな朝よ」なども歌われている。大中寅二作曲による歌は、遺愛幼稚園では非常に多く歌われているので、後に詳述する。

「お遊戯」「律動」は、非常に多くおこなわれている活動である。「律動」とは言うまでもなく、土川五郎による「律動遊戯」のことである。日誌のなかに「律動」の名目で曲名が掲載されているものは3曲しかないのであるが、その他の歌のなかに、土川関係史料のなかに曲が見られるものも数曲、見つけることができる。遺愛幼稚園に保存されている土川関係史料は多数あるが、それらのなかで遊戯の振りが付いている本は3冊のみで、他は歌曲のみが掲載されている。文部省唱歌や童謡など多様な童謡が掲載されており、土川が振りを付けて遊戯にしようと考えていた童謡が多数、収録されているものと考えられる。

以下、それぞれの活動として日誌に書かれている記事を、種目別に記載する。

・「リズム」ないし「リズムバンド」という語が見られる日：1952/11/13, 1953/5/9, 1953/5/22, 1953/9/9, 1953/9/18, 1953/11/10, 1954/3/5, 1954/3/10

・「律動」という表現が見られる日：

1951/3/20：卒業式で披露。題名は「まわりっこ」

1952/5/17：各組でおこなう。「飛行機」「人形」「兵隊」「兎」「象」「リープフォーク」

1954/3/5：題名は、なし。

1954/3/10：「お花の咲くまで」

・「遊戯」「うた」などに記載がある題名一覧：

「赤い羽」「赤ちゃんの行水」「秋」「秋の歌」「秋のもみじ」「秋はいいな」「あの子はだあれ」「雨」「インドの兵隊」「うさぎのお家は山の上」「うさぎのしっぽ」「うさぎのもちつき」「海へ」「おさ

るとあめ」「おそうじ」「おたまじゃくし」「おたまじゃくしに足が出て」「おちば」「おたより」「おつきさま」「おほしさま」「おほむぎこむぎ」「お山のいずみ」「かかしさん」「カステラ」「風の小人さん」「かへるの子供」「かわいいかくれんぼ」「菊の花」「きつねのよめいり」「キューピーの行列」「キラキラ」「キラキラ星」「くまのこちゃん」「ここまでおいで」「小人のお家」「ささ舟」「サンタクロース」「サンタクロースのおじいさん」「サンタのおくに」「しずかな湖畔」「シャンシャンおそり」「十人のお家」「そよりこそよりこ春よ春よと」「象さんのお帽子」「ずいずいずっころばし」「たきび」「狸ばやし」「小さな種さん」「近道小路」「ちるよちるよ」「月」「てるてる坊主」「でんわ」「とんがり帽子」「とんぼとんぼ」「どんぐり」「仲良し」「人参なす、かぶら」「はいしはいし」「はなの木さん」「花の咲くまで」「はとぼっぼ」「春」「春よ来い」「ひばり」「ひばりのおうち」「ビルディング」「ほんのり紅いもみぢ(ママ)の葉」「ぼんぼこ狸」「ポンポコポン」「まだまだねんね」「まつぼっくり」「マリヤさま」「虫が鳴きます」「虫の鳴き声」「もみじのは」「ももたろう」「山のみなさん」「夕焼け小焼け」「雪だるま」「幼稚園行進曲」「らくだ」

・「大中」と明確に記入があるもの：「雨降り」「うみべ」「きれいな朝よ」「たきび」

以上、一覧にしてみたが、これらのなかで幼稚園保存史料のなかに譜面があるもの、参考文献『日本童謡事典』のなかに曲が見られるものが幾つか存在するので、下に記載する。

・大中寅二作曲関係

『子供の歌曲集』第2輯所収

「お月さま」堀井利恵子作詩 昭和4年12月17日作

「お星さま」三井末子作詩 昭和5年5月9日作

「秋」三宅志津子作詩 昭和5年8月5日作

「海辺の体操」松崎功作詩 昭和5年8月2日作

『子供の歌曲集』第3輯所収

「サンタ爺さん」三谷幸子作詩 昭和8年1月6日作

「ゆきだるま」岡田美好作詩 昭和7年11月10日作

『子供の歌曲集』第5輯所収

「春」深山澄作詩 昭和16年9月10日作

『子供の歌曲集』第7輯所収

「ちいさいおてて」深山澄作詩 昭和24年3月30日作

「きれいな朝よ」深山澄作詩 昭和24年3月30日作

「雨ふりよ」深山澄作詩 昭和24年3月30日作

『小供(ママ)歌曲集 山びこ』葛葉國子作詩 所収

「春」昭和16年9月10日作

『幼稚園歌曲集』葛葉國子作詩 所収

「落葉」 昭和 27 年 9 月 1 日作

- ・青木存義作『かはいい唱歌 二冊目』所収の曲

「どんぐりころころ」 梁田貞作曲

「でんわ」 草川信作曲

「お月様」 草川宣雄作曲

- ・土川五郎関係書所収の曲

『律動的表情遊戯』第参輯所収

「飛行機」：オリジナル

『律動的表情遊戯』第四輯所収

「月」：文部省唱歌「出た出た月が」に振りを付けたもの

「兎」：文部省唱歌に振りを付けたもの

『律動的新唱歌遊戯の歌と曲 II』土川五郎編所収

「兵隊さん」 文部省唱歌

『土川五郎振 歌と曲 第十一輯の分』所収

「お玉じゃくし」 北原白秋作詩 中山晋平作曲

『遊戯の歌と曲 土川五郎振 昭和六年度第一巻』所収

「駱駝に乗って」 野口雨情作詩 中山晋平作曲

『土川五郎振 遊戯の歌と曲 筆記代用（昭和五年版）』所収

「笹の舟」 佐藤義治作詩作曲

『遊戯の歌と曲 土川五郎振 昭和八年度』所収

「ビルヂング」 西條八十作詩 中山晋平作曲

- ・一般的ではないが、幼稚園保存史料のなかに楽曲が見つかったもの

『新撰幼児舞踊』第一集 賀来琢磨著

「赤ちゃんの行水」 齊藤一正作詩，本多鐵磨作曲

- ・譜面は残されていないが、『日本童謡事典』にも掲載されている、ポピュラーな曲

「あの子はだあれ」「雨」「かわいいかくれんぼ」「てるてる坊主」「とんがり帽子」

「はとぼっぼ」「春よ来い」「ももたろう」「夕焼け小焼け」「たきび」「雨降り」以上。

土川五郎の律動遊戯については、ただ「律動」とだけ書かれていて具体的な曲名が記載されていないものが多く、どのような曲が踊られたのか判然としないのが非常に惜まれる。土川の律動遊戯に限らず、一般的に遊戯は円形でおこなわれるものが多く、遺愛幼稚園の遊戯室の形状は、こうした活動に適した平面計画であったと考えられる。

最後に確認したいのは、大正期～昭和初期の遺愛幼稚園において使用された童謡と、本論文で考察した昭和二十年代において使用された童謡とが、全く異なるものであった点である。年数的には

20～30年くらいしか変わらないにも拘わらず、用いていた楽曲集も全く異なるし、歌詞の文体や曲調も全く異なる。終戦を挟んだ時期には、幼稚園教育界に大きな変革が起きていたことが、音曲を見るだけでも明らかである。本書を執筆している平成24年周辺も激動の時代と言われるが、約二十年前の平成元年頃を思い出す時、幼稚園で歌われている歌は大正～昭和二十年頃ほど劇的には変化していない。日本の幼稚園界において、第二次世界大戦の影響は非常に強かったことが、楽曲を見るだけでも明らかである。

④紙芝居

昭和二十年代においては、遺愛幼稚園では紙芝居が連日、読まれていた。現存する保存史料にも、紙芝居は大量に残されている。また、完全ではないものの、日誌に具体的な紙芝居の題名が記入されていて、それが保存されている紙芝居のなかに確認できるのも特徴的である。下に挙げたものは、昭和二十年代の遺愛幼稚園で実際に読まれたことが、本書の第1節に転載した日誌のなかに確認できる、現存する紙芝居の一覧である。

「善きサマリヤ人」1949/8/26, 1950/7/6, 1951/1/26, 1951/9/1

「少年ダビデ」1949/9/17, 1951/9/6

「アシノクキ」1950/7/6

「みみちゃんとおおかみ」1950/7/6

「赤ずきん」1951/1/22

「ちこちゃんのにんぎょう」1951/1/26

「お母さんはどこへ」1951/2/7, 1951/3/1

「ヨナ物語」1951/2/7

「バナナれっしゃ」1951/2/14

「赤い花と青い海」1951/9/20

「白雪姫」1951/7/19, 1952/5/27

「クリスマス物語」1951/7/20

「カモトリゴンベエ」1951/9/5

「ピーターと狼」1951/9/7

「うさぎの郵便屋さん」1952/5/27

「せくらべ」1952/5/27

「りんりんかぼかぼ」1952/8/23

「サルカニ合戦」1952/10/29

他にも、題名は書かれていなくても「紙芝居」との表記のある日は多く見られる。

⑤「共同遊び（ままごと）」/ごっこ遊び/大型積木

この時期になると、回数は多くはないものの、ままごと（1952/10/9）や、ごっこ遊び（1952/5/26

「汽車ごっこ」）、大型積木（1951/7/20「積木でボートをつくり漕ぎっこ」）が日誌に書かれ、いわゆる模倣遊び・想像遊びが幼児の育ちにおいて重要な役割をなす「遊び」として認められるに至ったことが明らかである。日誌に記載されている「ままごと」「ごっこ」遊びは、自由遊びのなかでおこなわれた活動を既述してあるのではなく、クラス活動としておこなわれた。すなわち、こうした遊びが教育的効果を持つものとして明確に認められたことが、ここに示されていると判断できる。これも、「保育要領」において幼児期の成長発達過程が心理学的に明らかにされたことに関係すると考えられよう。こうした模倣的・想像的遊びは、我が国でもアメリカ新教育運動の影響を受けた幼稚園においては、大正期からおこなわれていたものであったが、遺愛幼稚園においてはまだおこなわれていなかった。遺愛幼稚園は、頌栄保姆伝習所の系譜を引く伝統的保育実践が選択されてきており、そこに遺愛幼稚園を牽引していた宣教師らの意向もあってか、こうした模倣的・想像的遊びといった進歩主義的な内容・方法は、大正期にあつては導入されなかったものと考えられる。それが、この昭和二十年代になって、とうとう採用されるようになった背景には、やはり「保育要領」の存在が大きかったのではないか。

⑥衛生への配慮：「手洗い」「歯みがき」という記述

この時期、日誌のなかに「手洗い」「歯みがき」という語が出てくるようになった。これは、大正期には見られなかったことである。大正期の分析では、虫菌を持つ幼児が非常に多かったが、戦後になって本格的に虫菌を防ごうとする意識が一般化したことが確認できる。

そもそも歯みがきの習慣は、そう古いものではなく、日本では明治36（1903）年、小林富次郎商店（のちのライオン株式会社）が「萬歳歯刷子」を発売したのが一般化の契機であった。間食として洋菓子類（キャラメルやチョコレート）を食べる習慣が明治末期から出現し、その結果として虫菌対策の一環である歯みがきブームや、歯みがき粉の販売促進などが展開していた⁷⁾。その後、大正14（1925）年4月から、小林商店は積極的に歯みがき粉の普及に乗り出したが、大正期の遺愛幼稚園日誌にも見られたように、当時は一般的に歯の衛生に対する社会認識が芽生え始めた頃で、まだ虫菌が多かったと考えられる。そうしたなかで、昭和6（1931）年には「学校歯科医令」が公布され、翌昭和7（1932）年には「幼稚園歯科医令」も公布、全国的に歯科衛生に対する意識を高める動きが見られた。こうした流れから考えれば、昭和二十年代の遺愛幼稚園において「歯みがき」が意識的に導入されるようになっていたのは当然の時流と判断できる。昭和27（1952）年6月5日には、活動のなかに衛生が積極的に採りこまれ、「きれいですか おかほ はをみがきましょう」という活動が組まれている。「歯みがき」という表記が見られる日は、以下のとおりである。1953/6/10, 6/11, 6/19, 7/11。この頃、時期によって毎日「歯みがき」が日誌に書かれているが、おそらく他の日も歯みがきはおこなっていたと考えるのが、流れ的に妥当であろう。

⑦月刊保育絵本『チャイルドブック』『キンダーブック』の登場

昭和二十年代の遺愛幼稚園では、『チャイルドブック』『キンダーブック』を幼児に購入させてい

ることが記録されている。また、これらのワークを幼稚園で行なっていることも、日誌から確認できる。知育教材として戦後の流行ともなったこれらの月刊誌が、遺愛幼稚園でも導入されていた。

これらの月刊保育絵本は、大正期にはまだ発刊されていなかった。『キンダーブック』は昭和2(1927)年11月にフレーベル館から創刊されたものである。当初は「観察絵本」と副題がついており、大正15(1926)年に示された「幼稚園令」における保育項目で「観察」が新たに加えられたことを契機として発刊されたものであると『フレーベル館100年史』は述べている⁽⁸⁾。遺愛幼稚園には、『キンダーブック』『チャイルドブック』を始めとした様々な月刊保育絵本や月刊保育雑誌が保存されている。幼児に購読させるとともに、幼稚園でも保育活動のなかで使用していたことが記録されている。

第1節の日誌のなかで、上記の絵本について記述がある日は以下のとおりである。

1950/4/12, 1950/7/6, 1953/2/17, 1953/2/18, 1953/3/4, 1953/4/7, 1953/7/16, 1953/9/7, 1953/10/21, 1953/11/10, 1953/11/11, 1954/2/12, 1954/3/10

結

昭和二十年代の遺愛幼稚園は、創立期以来のフレーベル恩物主義的、伝統的な保育内容の選択と構成を基礎としながらも、新しい時代に応じた保育へと転換すべく、保育内容の幅を広げていった。活動には、模倣遊びをしたり、多様なリズム活動を導入したり、月刊絵本を読んだりワークをしたり、衛生的側面の援助に配慮したり、屋外での活動を増やしたり、紙芝居を積極的に読み聞かせたりと、大正期には見られなかった多様な活動が展開するようになった。活動のなかにはアメリカから導入されたリズム活動なども見られた。

その一方で、遺愛幼稚園では、伝統的なフレーベル恩物活動も、量は減ったものの継続的におこなわれ、その方法は自由遊び型ではなく指導型の活動であった。また、製作活動もおこなわれ、恩物「切紙」を発展させたような形式での製作がおこなわれた。活動の流れも自由遊び中心の、当時の流行の一つであった「誘導保育」といった方法は導入されず、大きな活動の流れは保育者主導によって進められたのであった。

昭和二十年代の遺愛幼稚園では、昭和22(1947)年に示された「保育要領」の特徴である、幼児の発達を心理学的に分析したうえで、幼児の主体性を重視しつつ多様な活動を推奨するという基本理念を採用しつつも、遺愛幼稚園の伝統的な保育内容・方法を維持しながら独自の道を模索していたのである。

※本論文では、紙幅の関係から、史料の実際を掲載することが全く叶わなかった。何らかの機会を得て公表を試みたい。

注

- (1) 原名：American Methodist Episcopal Church, The Women's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church
様々な和訳があるが、本論文では通例に従い、このように訳す。
- (2) 永井理恵子『近代日本キリスト教主義幼稚園の保育と園舎 遺愛幼稚園における幼児教育の展開』学文社 2011
- (3) 日本キリスト教教育学会 第24回学会大会（桜美林大学）2012年6月16日（土）個人発表 題目：「遺愛幼稚園（北海道函館市）における昭和二十年代の保育実践」
- (4) 日本保育学会『日本幼児保育史』第6巻 1975 p. 250
- (5) 同上 p. 254
- (6) 同上 p. 254
- (7) 神野由紀『子どもをめぐるデザインと近代—拡大する商品世界』世界思想社 2011「子どもと洋菓子」 pp. 196～199
- (8) 『フレーベル館100年史』(株)フレーベル館発行 2008 p. 92

Education at IAI Kindergarten in 1950s

Rieko NAGAI

Abstract

The author introduces IAI Kindergarten in Hakodate, Hokkaido, the big northern island of Japan. IAI Kindergarten was established by the Women's Foreign Missionary Society of the American Methodist Episcopal Church in 1895 by missionaries from IAI Jogakko (the girls' high school) from the United States of America. This article examines the fundamental principles and methods, following orthodox Frobel theory, of IAI Kindergarten during the Showa era. Needless to say, the education of IAI Kindergarten was based on Christian faith and the enthusiasm of the American missionaries. Although IAI Kindergarten once closed in 1907 due to a big fire in Hakodate, since then its work has never ceased. After the fire, the school reopened in 1913 with the prayers of the missionaries and the strong demands and wishes of people in Hakodate. In this paper, the author focuses on the above-mentioned educational methods of IAI Kindergarten during the Showa era, especially during the 1950s.

Key words; IAI Jogakko, The American Methodist Episcopal Church, 1950's, Gabe (Fröbel), Howe